

地震被害 ハイチの子供激励

ボールはトモダチ

【サントドミンゴ(ドミニカ共和国)石戸諭今年1月に発生したハイチ大地震で壊滅的被害を受けたハイチの子供たちを激励しようと、サントドミンゴで開かれているサッカー親善交流で19日、ハイチ、日本、ドミニカ共和国の3カ国の子供たちの混合チームが作られた。国際医療救援団体「AMDA」が企画した。3カ国語が混じり、選手たちはボールを使って必死にコミュニケーションを取った。

AMDAが企画

各国の子供たちを三つのグループに分け、グループ対抗、AMDAスタッフや各国の監督、コーチたちが即席で作った「大人チーム」と対戦した。グラウンドには、ハイチチームが使うフランス語を基礎にした現地語クレオール、ドミニカチームのスペイン語、日本語が入り交じり、選手たちは身ぶり手ぶりでパスを要求したり、ゴールを決めて喜びあっていた。最初は日本人だけで固まりがちだった日本チームの選手たちも徐々に打ち解け、交流の輪が広がった。

参加したFC千里中央(大阪府)の東川健祐君(12)は「思ったよりみんなうまかった。被災キャンプ暮らしで練習できないのに。こんな世界もあるって分かった」と話した。

この日夕にはAMDAの菅波茂代表、各国大使館関係者も出席して文化交流会も開かれ、AMDAがハイチで展開する義足事業を説明した。続いて選手が各国の文化や歴史を発表。大阪府、岡山県、広島県から集まった日本チームは65年前、原爆が投下された広島復興を紹介し、「何もなくなっただ広島は今、高層ビルが建つまで復興しています。ハイチの方にこの経験を紹介したかったと話した。

日本、ドミニカ国 混合チームでサッカー交流



試合を通じて理解を深めたハイチ、日本、ドミニカ共和国の選手たち。ドミニカ共和国サントドミンゴで